

《アンケート》による授業（実践報告）

Des enquêtes dans le cours

仲 井 秀 昭

【要旨】

Je donne des cours dans plusieurs établissements : université, école spécialisée, association franco-japonaise, centre culturel... Dans les universités les étudiants sont comparativement peu motivés. Ils ont peu le sens de la communication. Il n'ont pas l'occasion de parler ni d'écrire en français.

Je fais en sorte qu'ils aient ces occasions : correspondance par E-mail avec des étudiants français de japonais, accueil d'étudiants français dans la classe. Mais cela ne peut pas se faire à chaque cours.

Mes cours pour débutants consistent en une dictée portant sur la page étudiée la fois précédente, les explications et les exercices de la méthode, et des « enquêtes » faites entre eux par les étudiants eux-même. Je présente d'abord un modèle. Les étudiants font la conversation à partir du modèle. Ils doivent demander aux étudiants désignés par le professeur. A la fin de chaque cours et à la fin de l'année, les étudiants remettent un rapport de leurs conversations.

〔１〕モチベーション

私はいくつもの枠組みでフランス語教育に携わっている。大学、短期大学、専門学校、日仏協会、カルチャーセンター、個人レッスン。

このうち、大学と短期大学と専門学校は「一般教養」。学生は必修単位の一つとしていくつか用意された外国語のうち1つを選ぶことを要求されるか、ケースによっては純粋なオプションとして、つまり単位は必修ではないが、学生の他の科目の履修状況によっては必要となる。

日仏協会、カルチャーセンターでは受講生は自発的に多くの場合「必要性」とは関係なく、フランス語を学びにやってくる。時間帯によるが、受講生の多くは家庭の主婦、あるいは働いている女性である。彼女らは必ずしも語学の完全な習得を目指している訳ではなく、集まり・学び・語ることによる充実した時間を求めてやってくる。

個人レッスンは多くの場合、モチベーションがはっきりしている。日本でピアノを学んだ後、フランスの音楽院に入学を希望する女性、高校卒業後、フランスでインテリア建築を学びたい女性、日本の大学のAO入試を受けるためにフランス語の基礎を学ぶ必要のある高校生……。このような場合、単に語学の勉強・練習をサポートするだけでなく、フランスの教育システム

を調べ、学校や教授たちに連絡したり、つまり受講生とフランスとのコンタクトを総合的に手助けすることになる。

日本の大学等ではフランス、あるいはフランス人とのコンタクトは必ずしも前提になっていない。多くの学生はフランス語を使う機会をまったく持たないし、将来的にも旅行でフランス及びフランス語圏を訪れることを希望するものは多数派ではない。フランス語はフィクショナルな存在にさえならない。

日韓共催のサッカーのワールドカップの日本代表監督がフランス人であり、彼がメディアにおいて多くフランス語で語ったことは多くの学生をフランス語に慣れ親しませることになった。テレビコマーシャルにはフランス語がしばしば使われている。それらは学生が大学のカリキュラムの中でこの言語を選ぶ際、多少影響を与えたかもしれないが、使う言語としては多く認識されていない。つまりコミュニケーションへは向かっていないのである。

〔2〕 コミュニケーション

数年前から私は大学の教室においても「フランス」とのコミュニケーションの枠組みを導入している。主な対象はフランスの大学の日本語学科の学生である。

フランスでは少しずつであるが、日本語を学ぶ若者が増えてきている。INALCO（国立東洋言語文化研究所）やパリ第7大学、リヨン第3大学等の日本語学科に加えて、「国際化」を歌っている5年制の *grandes écoles*（予科を含む *préparation intégrée*）では予科で日本語を用意している場合がある¹⁾。このような教育機関では（多くのフランスの *grandes écoles* がそうであるように）研修を必修としており、日本語を履修した学生は日本研修が課せられている。第1学年（日本の大学1年生）を終えた学生は数週間、自分の専門科目とは関係なく、日本で「アルバイト」を行う。第2学年（以降）では自分たちの専門に合った日本の企業を選び、さらに研修が行われている。

基本的にフランスの高等教育機関（大学、*grandes écoles*）では専門教育のみがカリキュラムにのせられており²⁾、日本での外国語教育（特に《一般教養》）とは有り方が違うが、このような場合（予科）は《コミュニケーション》の捉えかたは日本の大学での語学教育を考える場合、参考になるだろう。³⁾

〔3〕 E-mail

さて、このようなフランスの日本語学科や予科の教員と連絡を取りつつ、また大学の専任の教員と相談の上、日仏の学生の不定期であるが2つのレベルでのコミュニケーションを実現

している。

まず、E-mailによるコミュニケーション。リヨン第3大学日本語学科1年生のクラスで日本の学生とE-mailの交換をしたい学生を募集した。主に新学期である10月に2年続けて(2001年と2002年)で実施したが、それぞれ10名を越える学生が希望してきたので、私の担当する関西大学を初めとするいくつかの大学で紹介することになった。

学生の最初の反応は熱意に溢れたものとは言い難く、「フランスで日本語を学ぶ学生と文通をしませんか？」の呼び掛けにすぐに返事をする学生はまれであった。次にフランスの学生のE-mailをプリントして紹介したところ、映画やマンガや武道など日本の文化への関心が高いことに共感したのか、授業後、申し出て来た学生は何人か出てきた。しかし、数週間後、様子を尋ねてみると、実際にE-mailを送った学生は僅かだった。

そこで、比較的少人数クラスで学生の希望を聞いた上で、授業の中で例文を紹介し、さらに学生の書いたE-mailの添削を行うことにした。⁴⁾ 学生達はすでに半年から1年以上、フランス語を学んでおり、出来るだけ単純な構文で身近な興味や生活の紹介を書くようアドバイスし、例文を板書した上で、辞書を引いても分からない語彙・表現については質問させた。

内容と構文はそのまま、文法的・語彙的な誤りを訂正したフランス語によるE-mailの交換が始まった。その頃、大学のコンピュータ・ルームを数回使わせて頂いたので、同時にフランス語の入力の仕方、コンピュータの基本的な使い方の説明が必要になる場合もあったが、概ね学生達は楽しんで授業に取り組んでくれた。ただ、教員が中に入るということもあり自由なコミュニケーションが展開されたとは言い難い部分はあるが、最初の返事が届いた時の学生の興奮は従来の授業になかった要素であった。

多くの場合、数回のやり取りで途切れたのであるが、翌年になって、一部の学生は英語によるE-mail交換を続けていることを知ったのは、文通相手のフランスの日本学科の学生が日本を訪れることを前年に担当した学生からのE-mailによってである。フランスの学生は教室を訪れ、別のレベルのコミュニケーションを試みる機会が与えられたのである。

2001年の試みはE-mail交換を別の形にすることを考えさせた。通常の授業の中で得た文法・語彙の知識の応用的な面を考え、表現の型や例文を示しながら説明しようとしたが、数回のレッスンでは学生の文章を添削するだけで精一杯であり、学生の作文力を伸ばす機会になったという実感は持てなかった。しかし、1年間フランス語の基礎を学んだ後で、それと実際にコミュニケーションに使ったという満足感を得た学生は多く、何らかの形で続けようと思った。

フランス側の学生のE-mailは日本語とフランス語と英語を自由に交えて自然に書かれており、当然教師のチェックは入っていない。「日本語」は多くの誤りを含んでいるが、他の言語を補足的に使うことで、理解は可能である。

2年目(2002年)の秋、私が導入しようとしたやり方はこのような自由なコミュニケーシ

ョンである。学生達には E-mail の中に部分的であってもフランス語を必ず入れることを要求し、細かい 1 つずつのチェックしない代わりに、時に「文通」の状況を報告させた。それがどの位「続いた」かの確認はしていない。

リヨン第3大学の日本語学科の日本人教員からはこの新学期（2003 年秋）から日本の学生との E-mail 交換を授業の一環として考えているとの希望が届いており、基本的には昨年のやり方をもう一度考えている。

〔4〕 ゲスト

上に挙げた E-mail を使ったフランスの日本語学科の学生とのコミュニケーションは実際のコンタクトに発展することになった。学生は大学のフランス語の授業に参加することを希望し、専任の教員の許可の元、授業の 1 回に「ゲスト」を招くことが何回もあった。学生達には予めゲストを呼ぶことについて意見を求める。ほぼ毎回、授業の初めには書き取りの小テストを行っており、それが中止になるという理由だけでも学生には歓迎される。

何年前か、何の用意もなく、フランス人学生を教室に招き、学生と「交流」をさせようとした時、何の盛り上がりもなく 1 時間が過ぎたという経験を生かし、いくつかのタイプのやり取りを予め想定しておく。

- ・ 自己紹介と質問を前の時間から用意させる
- ・ 教員とゲストの間でやり取りをした後、学生に質問を振ってゆく
- ・ 口頭試験への立ち会いという形の関わり

自己紹介と質問を「順番に」学生にやらせた場合、同じタイプの自己紹介や質問が続く可能性が多い。教員とのやり取りの延長線上に学生に話させた方が自然な展開が出来る。

学生の緊張をほぐすために、フランス人学生には最初に日本語で挨拶させ、次に「やり取り」においては時に日本語を交えながらも、出来るだけ平易なフランス語を使ったほうがいい。話の展開が複雑になってきた場合は教員が通訳をすることもあるが、使用言語（英語、日本語...）を自由にする事は授業の後の自発的な集まりに残される。

「口頭試験」は平常試験の一環として時々行うが、一人あるいはグループで、既習の表現を中心に会話を行う。「ゲスト」はそれを聞いて時に「介入」する。

今年の試みにおいて、ゲストのフランス人学生が辛抱強く聞いて、毎回同じような質問をしてくれたが、1 つ、2 つ知らない語があったり、語順を並べ替えただけで、聞き取ることが出来ないのは、有効なヒアリング練習の必要性を感じさせた。

課外に学生が自発的にフランス人を囲んで集まることもある。今のところ、トラブルのようなものは聞いていないが、教員は時に慎重にするべきであり、私はフランスの学生との交流は知り合いの教員の生徒に限っている。

〔5〕コミュニケーションとしての授業

このようなフランス人学生とのコミュニケーションは E-mail 交換の時以上に、多くの学生の満足感を得た。しかし、フランスの学生との E-mail あるいはゲストとして迎えることを授業のベースにすることは出来ない。作文の指導には時間的制約があるし、ゲストを日常的に迎えることは不可能である。

昨今、“コミュニケーション・クラス”が多くの大学で設置されており、「会話的表現」を中心に学んだり、“ネイティヴ”の教師により、習得言語の会話練習が教室でもされるようになった。

しかし、講義、授業そのものが、少なくとも語学の学習そのものがコミュニケーションであるととらえることが出来る。研究の目的で文献を読むための語学として位置付けられた時代は遠ざかりつつある。あったとしても専門教育の一環としてなされている。多くのフランス語の授業では文法事項はほどほどにして、会話的表現や日常生活で見出されるテキストの読解の訓練を中心とすることになっている。そのような方向性をふまえ、私は、フランス語の学習に不可欠の動詞の活用や音の綴り字の読み方の習得を定着するために毎回授業の最初に書き取りの小テストをする一方、文法のレッスンであっても、授業の「使用言語」をフランス語にしている。これが成功した場合は、世間話や冗談もフランス語を使い、学生に喜ばれることさえあった。

理想は習得中の文法事項や語彙を使って、教室で「話す」ことだが、当然未修得の文法事項・語彙を使うこともある。そのような場合、板書での説明によって、なるべく習得言語（フランス語）の語彙・分法力を高めることを、授業そのものがコミュニケーションと学生に体感されるためにも努力したいと思っている。

〔6〕アンケート

このような方向性は極めてうまくいく場合もあるが、教師とのコミュニケーションが学生の興味を引き続けることが困難なクラスもある。教室内の使用言語を出来るだけフランス語にして、文法と基本語彙を日常的なものにしようとする試みと平行して、本年（2003 年度）から採用しているやり方が「アンケート方式」である。

クラスや科目によるが、この「アンケート」を使った授業の構成は次のようなものとなる：

- ・ 書き取り（小テスト）： 前の時間に習った部分（特に教科書内）
- ・ 教科書の事項の説明とそれを元にした会話練習： 出来るだけフランス語を使う
- ・ アンケートの説明： 板書して、すべき会話のパターンを示す
- ・ アンケートの開始： 学生は指定された人数のクラスメートに質問をする
- ・ アンケートの報告： 学生は指定された用紙に会話の内容を報告して提出する

具体的な内容については後述するが、このような「アンケート」を使う一番大きな理由は「学生間のコミュニケーションを促進させること」、ついで、自分のことを語る言い方と基本的な質問を繰り返すことによって有用な表現の定着が望めること、相手の発言の中にある語彙の発展を聴き取る練習になること、である。

注意すべき点は、教員が教室の中を歩き回って、作業がきちんとなされるいるか、また発音をチェックしなくてはいけない（正しい発音の定着は基本的な表現であっても想像以上に難しい）。また、アンケートの項目はあまりにもプライベートな内容は避けるべきなことは言うまでもない。

〔7〕 アンケートの例

具体的なアンケートの例を示す。

アンケートの開始の際、次のような板書をする：

A : Bonjour ! Je m'appelle Ken.

B : Bonjour! Moi, c'est Mariko. Tu habites où?

A : J'habite à Suita. Et toi?

B : A Sakai chez mes parents. Tu habites tout(e) seul(e)?

A : Oui, tout(e) seul(e). / Non, chez mes parents.

これを学生は指定された人数と繰り返さなくてはならない（Aを担当するかBを担当するかはその場で決まる）。例えば10名と会話を繰り返した学生は次のような報告を教師に提出して、退出する。

1) Mariko habite à Sakai avec sa famille.

2) Ken habite à Suita tout seul.

3) Yumiko habite à Nara toute seule.

（以下省略）

別の授業では次のような会話パターンがありうる：

A : C'est quand ton anniversaire?

B : Le 23 septembre. Je suis né(e) à Kobe en 1984.

A : Ah bon! Moi (aussi), je suis né(e) à Himeji (Kobe) le 3 mars 1985.

この場合、報告文は、《Hideo est né à Kobe le 23 septembre 1984.》等となる。

これ以外に《Qu'est-ce que tu aimes comme film?》等の趣味や《Où est-ce que tu es allé(e) pendant les vacances!》等の過去時制もありうる。

〔7〕アンケート方式の成果と今後

約半年間、このような「アンケート方式」をいくつかの大学で導入してきた⁵⁾が、比較的静かで（ある面、私語が少ない）、無表情で（反応が鈍い）、学生間のやり取りが少ない再履修クラスで劇的にうまくいった（盛り上がった）のは印象的だった。

それに対して、このやり方をカルチャーセンタや日仏協会でやろうとした時は思った以上に成功しなかった。まず、立ち上がってクラスメートに質問をして回るというスタイルは年齢が高い生徒たちの間ではスムーズにいきにくい。それと、短い時間に会話パターンを覚えて、使いこなす、メモを取ることを要求されるこのやり方はむしろ若者のリズムに合っていると言わなければならないか？

今までは会話を板書してきたが、レベルが上（中級）のクラスでは単にテーマを指示して会話の内容は学生に任せることもあり得るだろう。しかし、初級クラスでは比較的単純な内容であるにもかかわらず学生は喜んで繰り返したし、かえって複雑な会話文を用意した場合は混乱が生じた。

今年（2003年度）は4月から5月にかけて、フランス語会話に慣れるためにもこの「アンケート方式」の授業を何回か行ったが、前期試験が近付いてくると、教科書の内容も複雑になり、時間的余裕がなくなってきた。毎回やっても飽きる部分あるだろうし、年間を通じたプログラムを考え直してみたい。

一つの目標として、年度の終わりに「クラスメートについての（アンケート）報告」が出来ればと思う。アンケートでは趣味や夏休み中に行った所や様々な質問をお互いに投げかけるのだが、それらを一人一人の学生がまとめることが可能である。

〔8〕 アンケートのまとめ (例)

J'ai demandé à dix camarades. Quatre d'entre eux préfèrent le cinéma au théâtre. Deux ne vont jamais au cinéma. Trois vont très souvent au Karaoke. Une n'y est jamais allée, parce qu'elle déteste chanter.

Quatre ont un frère ou une soeur. Deux ont un frère et une soeur. Un a deux frères. Une a deux soeurs. Deux sont fils ou fille uniques.

Trois sont partis en voyage avec des amis pendant les vacances. Deux avec leur famille. Deux sont allés à l'étranger. Trois sont rentrés chez leurs parents. Deux sont restés à Osaka.

Mariko aime le cinéma. Elle y va souvent. Elle aime les films américains. Elle aime comme acteur Tom Cruise et Steven Spielberg comme cinéaste. Elle a un frère, Ken, qui est lycéen. Elle travaille dans un café à Umeda deux fois par semaine. Elle fait du tennis une fois par semaine. Elle est membre d'un cercle de tennis à la fac.

Tsutomu habite tout seul à Suita. Sa famille habite à Fukushima. Il est de Fukushima. Il fait du judo depuis le collège. Il est très fort en judo. Il aime aussi la musique. Il a beaucoup de CD. Il va de temps en temps au concert.

注

- 1) 例えばリヨン・インサ工科大学 Institut National des Sciences Appliquées de Lyon。この大学では国際化を目指し、ヨーロッパ、アメリカ、アジアからの学生を受け入れる特別セクションが開設し、フランス人学生と外国人学生が半数ずつ登録してる。「外国語を学びながら、実際にその地域の人々と交流することによって、国際感覚を身につけたエンジニアを養成することが目的」とされている。www.insa-lyon.fr 参照。
- 2) 日本語学科では別の問題が発生している。フランスの大学では専門科目のみを学ぶことが多い一方、単位を取得出来る、つまり進級出来る可能性がかなり低い。1つの例として、約10年前INALCOの学生たちは「新入生千人のうち2年生に進級出来るのは200～300人、さらに3年には50～60人」と話していた。また日本語学科では漢字や文法の習得、仏訳・和訳を中心とした「古典的な」教育が残っている場合があり、学生達は緊張感の中で長時間の勉強をすることになる。一部の学生は転科をしたり、一方、進級を諦め、現地（日本）で学ぼうと来日する。日本語専攻生が必ずしも就職が良いわけでないことを考えたら、専攻生数が減っていないことはそれだけ日本への関心が定着していると言える。
- 3) フランスでは高校 (lycée) でも日本語教育が少しずつ広がっている。笹川日仏財団 <http://www.spf.org/fijs/> の助成により日本語を学ぶフランスの高校生がフランス語を学んでいる日本の高校に滞在するプログラムが毎年行われている。
- 4) このような教員の添削を前提とした文章の交換については、3～6年前、いくつかの大学の仏作文を中心とした授業を担当した時に採用したやり方を紹介したい。

最初の数回は文法の復習を行いながら例文を示し、さらに学生にも同じパターンに従って書かせる。これに慣れた頃、学生は自己紹介を中心とした作文を書き、提出する。教師は添削し、アトラダムに学生に配る。受け取った学生はそれへの「返事」を書く。返事は教師の添削を経て、元の学生に届けられる。その学生はさらに返事を書く。これが1年間続き、一人の学生は2～3人の教室内のペンフレンドと「文通」を続ける。

時々、1時間を使って、教師は繰り返される傾向のある間違い（文法・語彙・表現）を板書を交えて解説する。

最初は日本語も含めてなかなか書くことに慣れなかった学生も、思った以上の「深い」会話が展開されたりして、フランス語を書くことが自然に出来てきたように思う。

E-mail が普及してきた段階で E-mail による文通を試みたこともあったが、これは自然にフランス人学生との文通に移行していった。

5) 私が担当するすべての大学、クラスで導入してきたわけではない。また、ほぼ毎回繰り返したクラスもあれば、数回にとどめたクラスもある。